


楽典の勉強方法について

音楽を学ぶにあたっては、どのような種類の音楽であっても、その音楽の基礎的な部分の仕組みを理解しておくことが重要です。

そのためには、まず「楽典」という音楽の最も基礎的な理論の内容を理解し把握することから始めなければなりません。楽典は決して理論のための理論として存在しているわけではありません。どのような理論であっても、理論は音楽と共にあって、その内側を支えています。したがって、楽典の学習は、本来、演奏やレッスン等を通じて音楽とともに自然な形で理解され、習熟の度合いが深められるべきものなのです。

しかし入学者選抜の科目としては、本来の自然な学習形態から離れて、ペーパーテストの形をとらざるを得ません。それでも、楽典の試験問題として、実際の楽曲に基づいて出題されることが多いのは、楽典を理論として孤立させないで、できるだけ楽曲に即した事柄を尋ねたいという出題者の意図の表れのように思われます。試験問題への対応として、解説書や問題集から得られた楽典の知識についても、時間はかかっても、実際の音楽と結びつけ、生きた理論とするための努力が必要です。楽典の勉強は、音楽の仕

組みを理解するために、また、自分の音楽を構築していくためには是非とも必要なものですから、どうしても知りたい、理解したいという強い欲求をもって、勉強していただきたいと思います。

楽典の勉強方法として、まず、**テキスト***の理論的な部分を理解することに時間をかけることを勧めます。この勉強をなおざりにして、練習問題に次々と挑戦していくやり方は、決して効率のよい学習方法ではありません。楽典に自信がない人には、特に「音程」の項目から入念に復習することを勧めます。音程は音楽的な理論のすべてに関連する重要な基礎となるものですから、単に理解しているだけにとどまらず、反射的に音程を読み、記譜することができ、また音として表現できるようになるまで繰り返し練習することが大切です。このような地道な努力の積み重ねが、やがては楽典の総合的な理解につながります。たとえば問題の実施に際して、確実な理解をともなって出した答えと、偶然に見つけた答えとでは、仮にどちらも正解であったとしても、音楽的な基礎力においては大きな差となります。重ねて、テキストの内容の徹底した理解に努めることを勧めます。



次に、実際に **練習問題** にあたってみて、設問のされ方、種類や傾向などについても知っておくことが必要です。出題の仕方は多少異なりますので、いろいろなケースに慣れておくことも大切です。理論に関する説明や解説を精読して、ある程度の理解が得られたならば、その段階にふさわしいテキスト本文中の練習問題や、それに該当する他の問題を解いてみて、もし、不足している学習上の事柄が見つければ、テキストを読み返し、より深い理解に努めてください。その上で再び練習問題に挑戦したり、場合によっては、実施済みの問題に関しても再検討してみることを勧めます。

以上のような過程を幾度も反復することが、楽典の徹底した理解につながります。このようにして、ある程度の理解が得られたならば、次の段階として、応用性の高い問題や実際の試験問題に挑戦し、**真の実力** を養うことが、無理のない形での楽典攻略法になると思います。

次に、この **問題集そのものの勉強方法** について以下の方法を勧めます。

まず、日頃接している楽譜を注意深くていねいに読み込む習慣を身に付けてください。

【課題Ⅰ】 に関しては、「明解新楽典」の前編を前述の方法で学習してください。また、その中で出題される音楽史(音楽基礎知識)については、「音楽基礎科目認定テスト実施要項」に掲載されている出題範囲を十分に理解してください。

【課題Ⅱ】 は鍵盤図を基にした出題が中心です。音程、音階、和音などについて応用性の高い問題が扱われています。これに対応するには、「異名同音的転換」の理解と習熟が何よりも要求されます。そのためにはテキスト後編の異名同音的音程や異名同和音などの項目を徹底して理解するように努めてください。また、調の関係や和音の響き(長三和音・短三和音・・・)や調判定などに関する問題も含まれます。困難な問題には繰り返し挑戦し、正解に到達できるまでがんばってください。

この問題集には模範解答が収録されていますが、原則として自分自身で答えを出してから参照してください。答えを出すための努力をせずに、安易に解答に頼ることは避けるべきです。みなさんの健闘を祈ります。

* 「楽典」の出題傾向に最も適応しているテキストとして、『**明解新楽典**』(音楽之友社発行)を推奨します。

